

---

# ~ 裏切りの空 ~ 【学園篇】

秋川智夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「裏切りの空」

【学園篇】

### 【Nコード】

N5876J

### 【作者名】

秋川智夜

### 【あらすじ】

無事に終わるかと思えた国王の誕生祭、信賴していた者たちの突然の裏切りにより王宮は地獄へと一変した。

17年前のあの日の事件からすべてが始まった。

国王の死…

突然の裏切り…

裏で暗躍する影…

そして真実…

少年は真実を知らされるその時少年は何を思い。何を決意したのだろうか。

ここは何処だ。

この建物はもしかして王宮か？

へえ、近くで見るとこんなに大きかったんだな。学園から見ると何倍も大きくそして何よりキズ一つない純白の壁、見事なまでの彫刻が月明かりに照らされ神秘的な雰囲気を感じさせる。

授業で聞いた話によればこの王宮は物理的攻撃はもちろん魔法も一切効かないらしい。なんでもこのセレスティア王国の初代国王がかけた魔法により守られているらしい。試しに魔法をかましてやろうかと思ったがやめた。

見る限り警備の人は見あたらないのだが、もし見つかりでもしたら死罪は確定だろう。

まず王宮に一般人の自分がいる時点でおかしいのだ。

なぜここにいる立ってるのかすらわからないのに捕まりでもしたら大変だ。

だからといってこのまま帰る気はさらさらない。こんな機会は二度とやってこないかもしれないこの際王宮を探検してみよう。

自分でも馬鹿なことだとは思う。だが今はなによりも好奇心がまさっていて自分でも感情のコントロールが出来ないほど興奮している。

王宮は17年前の事件以来閉鎖的になっている。それより前は少しではあるが王宮内も一般公開もされ国王と直接話す場が設けられていたという。

王族は民と直接接することにより民の国に対する意見や感情を知りよりいつそうよい国に変えるためにという法律があつたのだ。

今やこの国の王家の血筋もリファイン王子のであるため敵国の暗殺などが考えられるために教団側の助言により凍結された。

外見でこの美しさなのだ中は比べものにならないほどすごいに違いないというのが自分が導き出した答えだった。すばらく庭園を満喫して、ようやく長年の夢であつた王宮内に侵入しようとした時突如静寂に包まれた王宮に爆音が轟いた。爆発が起き一拍をいて何十もの人影が王宮の塀を乗り越えてきた。見つからぬよう近くにあつた生け垣に飛び込み身を隠した。

塀を乗り越えてきたのは教団の十字軍だった。なにが起きているのか解らない、もしかすると17年前のようなことが起きようとしているのかなどと思考をめぐらしているうちに隠れていた生け垣が消え去り炎の中にいた。

突然のことに驚きながらも急いでこの炎の中を出ようとしたが不思議なこと火傷どころか熱ささえ感じなかった。状況を把握しようと周りを見渡す。

そこにあつた何百もの人の死体が転がっていた。ただの死体であつたならまだよかった、腕がとれたモノ、臓物がはみ出したモノ、人としての原型すらとどめていないモノもある。

不意に吐き気がこみ上げてくる。死体を見たことがないわけではな

い。今まで見てきたモノは完全な形であった。  
こんな地獄のような場所から一刻も早く去りたかった。

少しずつ吐き気もおさまりあった。ふと耳をすませてみると金属がぶつかる音と声が聞こえてきた。そして音の方に歩き出していた。直ぐにでもここから離れたいと思っているのにまるで見えない何かに引っ張られているように歩み出す。

何かを問いかけるかのような悲痛な叫び声が聞こえる。それを嘲笑うかのように続いて金属音、魔法を使ったのだろつか地響きがおこる。

前には戦っている二つのシルエットが見えてきた。あと少し、あと数歩で見えてくる。心臓が早鐘のようになっている。まるで知ってはいけない何かがあるかのように本能がこれ以上進むのを拒んでいる。一步また一步と進みふいに視界が開ける。

そこには聖人を思わす雰囲気のある男、そしてもう一人男を見ようとした瞬間に目の前が真っ暗になりそこで夢は終わりを告げた。

## 01（前書き）

（ブワル新聞）

18日に起きた事件は皆ももう知ったことだろう。

セレスティア王国第86代国王アレクサス・セレスティア・クライアス様ならびにすべての王家の方々がお亡くなりになられた。

国はまだ公にはしていないが我がブワル社が教団からつかんだ情報によればアレクサス国王は国王直属の親衛隊天空の騎士団の反乱により殺害されたとのことだ。

天空の騎士団といえば国王自らが信頼する者を指名し集めた集団である。団員には帝の称号を持つ光帝、炎帝、風帝をはじめ、時の神をその身に宿す神人しんとのクロノス様を含め12人が所属している。

18日、王宮ではアレクサス国王の25歳の誕生祭が開かれていた。誕生祭には王家の血筋の方々に貴族の方々、アレクサス国王の誕生を祝うために集まった各国の使者が集まった。

無事終わるかに思えた誕生祭であったがアレクサス国王の閉会での演説の時それは起きた。演説がはじまった瞬間アレクサス国王の後ろに控えていた二人の騎士団員がアレクサス国王に魔法を放ったそれを合図に他の騎士団員も攻撃を始めたという。

だがその反乱の情報は教団にもれていた。それを知ったジヨゼフ教皇はアレクサス国王に進言したが相手にされなかった。それもその

はずだ天空の騎士団は国王が唯一信頼する者たちが集まっているのだ。教皇は何かがあった時のために王宮の外に気付かれぬよう十字軍を配置した。式も閉会の演説となり十字軍の誰もが気を抜いたときに天空の騎士団の反乱が起こった。

十字軍が会場に到着したときには集まった人々のほぼすべてが息絶えていた。アレクサス国王は突然の奇襲にもかかわらず生き抜き勇敢にもジョゼフ教皇他数名とともに騎士団と死闘を繰り広げていた。十字軍が応援に駆けつけたとはいえ相手はセレスティア王国屈指の者が集まった天空の騎士団だ簡単に鎮圧できるはずもなかった。それでも多勢に無勢不利とみた天空の騎士団は逃亡を謀った。

何とか天空の騎士団の反乱は鎮圧できた。だがその代償はあまりにも大きかった。アレクサス国王をはじめ王宮にいた使用人までもが殺害された。生き残ったのは教皇とほんの一握りの十字軍だけだった。

たがまだ絶望してはいけないギルドの調査部によれば今年の夏に生まれたアレクサス国王の第一子のリファイン王子のご遺体が見つかっていないとの事だ。誰かが王子を助け出したのかはたまた天空の騎士団が連れ去ったのかは解らない。もし王子を保護している貴方がこの新聞を読んだならこの国の希望を無事に返していただけたことを切に願う。

全ての元凶である天空の騎士団の目的は未だ不明である。逃亡した天空の騎士団の団員は光帝のアイリス、風帝のエレオン、炎舞のジオブリート、七変化のルミナスの4人。見つけた者は必ず王国軍またはギルドに報告して下さい。けっして捕まえようなどとは考えないで下さい。



以上が現在我がブワル社が得ている情報である。

そして今回の事件で亡くなられた全ての方々にここに深く冥福を祈ります。

エバー・ラスター

小鳥のさえずりが聞こえてくる。カーテンの隙間から差し込む朝日がまぶしい。起きたばかりの目を覚まそうと目をこする。なにやら夢を見ていた気がする、夢には大きな建物があったのは思い出せる。それから先はまったく覚えていない。憶えていないということは、それほどたいした夢ではないのだろう。二度寝しないようベツトから体をおこす。二階にあるこの部屋の中はいたってシンプルな内装だ。これといった趣味を持ってはいないので机やベツト、本棚など必要最低限の物が置いてあるだけだ。部屋を出て階段を下り朝食を食べるためリビングに移動した。

「やあ、おはようリーフ今日はいつもより早いね。」

「おはよう父さん、変な夢を見たみたいでねはやく目が覚めたんだよ」

椅子に腰掛け新聞を読んでいる男性はエミリオ・クライン。俺の父親だ。とはいっても本当親子ではない。エミリオが17年前にギルド任務のときたまたま寄った村が魔物に襲われていたらしい。村は魔物の襲撃により皆殺しにされていて唯一生き残っていた俺をつれ帰り育つてることにしたらしい。その時に付けられた名前がリーフだった。

「さてリーフも起きて来たことだしそろそろ仕事に行ってくるよ」

「もう行くの、起こしてくれたら朝ご飯作ったのに」

エミリオは料理が苦手らしく自分で作ることが出来ないので何時

もリーフが作っている。この家で家事はほぼリーフが担当している。もともとエミリオはあまり家に居ないことが多かったため自然に身についた。

「それとしばらく帰ってこないかもしれないから戸締まりはしっかりね。しっかり食事もとるんだよ」

エミリオはギルドで長期間の任務をよく好んで選ぶ。長期間の任務はあまり人氣がなく選ぶ人も少ない。なのでエミリオが率先してこなすことで任務を受ける人が増えてくれるだろう、というのがエミリオの考えらしい。昔からのことだがリーフが大きくなり一人でも心配しなくてもよくなってからはさらに増えた気がする。月に一度も帰ってこないこともしばしばある。

「大丈夫だよ。いつまでも子供扱いしないでほしいな。いつてらっしやい父さん」

「行つてきます」

こちらを振り向き微笑んで行つてきますと言うと家を出て行つた。俺も朝食を食べ、たまには早く学園に行こう。

セレスティア魔法学園は王都の中心つまり王宮の隣に位置している。隣といっても学園と王宮の両方共この王都で1、2番の面積の広さを誇る施設なので隣とっていいのか解らない。魔法とは誰もが使えるものではない。そのため学園には魔法をはじめと色々な学科が存在する。学園の設立当初は戦争の要である魔法使いの

養成のため作られた、だが時代を追うごとに争いも減り平和になり国家は武力だけでは成り立たないという考えからその膨大な敷地を利用し学問や商業を発展させるため多数の学科を作った。

多数の学科のうちリーフが在籍するのは魔法科だ。魔法は魔力があれば努力次第で誰でも使うことができる。ところが魔力をもつ人は少ない、数千に一人の割合である。親が魔法使いの場合魔力は遺伝することが多い。稀に親が魔法使いでも魔力をもたない子供もいる。また逆に魔法使いではないが魔力を持つ子供もいる。その場合その子供は可愛がられ幸せな子供時代をすごす。

それもそのはずである魔法使いは国からたくさんの優遇措置がなされるのだ。その一つは王都の魔法学園に無償で入学できる。卒業後は大多数が軍に入るかギルドに無条件で入る事ができる。もちろんどちらもふつうの人も入れるが厳しい試験に受からないといけい平和になったとはいえ国同士の小競り合いは起こる、そのため魔法使いが軍に多くいればいるほど他国への抑止力になる。そのかわり攻めこられた場合前線に送られてしまうがセレスティア王国の場合大陸最大の王国のため攻め入る国は少ない。それでいて給与がよいため生涯生活が安泰である。

近年、軍を縮小すべきという意見もある。軍人の給与は国民から税からでているため何もしていない軍などあっても税金の無駄遣いである。との事で三年前の一度小規模の暴動が起きた。暴動はすぐに鎮圧された。その甲斐あってか今までギルドが一任していた魔物の討伐を軍とギルドが連携して討伐を進めることにし、それからは魔物による被害が減ったとのこである。

そのことは魔物の襲撃により家族どころか村そのものが滅んだ過去のリーフにとってはとても喜ばしい出来事であった。

リーフは軍ではなくギルドに所属しようと思っている。ギルドは民間からの依頼も請け負っている。けっして軍を批判する訳ではないがギルドの方が人々のためになるからだ。昔から正義感の強いエミリオに育てられたためかリーフも困った人を見捨てることができない。なので民間からの依頼が多数あるギルドを選ぼうと思っている。そのためには学園でしっかり学ぶことからしなければと意気込んでセレスティア魔法学園に入学した。

セレスティア魔法学園までは家から歩いて30分ぐらいの場所にある。ただそれは普通に歩いた場合である。魔法使いであるリーフは普通ではなかった。リーフの得意な魔法は風属性で、自分に風を纏わせ素早く自由自在に移動することができる『風装』という上級魔法に位置する補助魔法を使い学園へ通っている。『風装』かなり高度な魔法である、高い技術と集中力、精密な魔力コントロールが必要である。そのどれか一つでも欠けてしまえば最悪手足が吹き飛んだり、内蔵が破裂したりする。下位の魔法使いは纏うのではなく突風で体を押し出しだけの直線にしか移動できない『風装』モドキを使う。

なぜこんな高度な魔法が使えるのかというとこれもエミリオのおかげである。エミリオはギルドで指折りの風使いである。魔法学園に通うよりもっと前からエミリオから魔法を教わっていたからで、そのかいあってリーフの風属性魔法の腕はかなりの物だが他の魔法は人並みである。

『風装』を使つての登校は学園までの時間を実際5分まで短縮できるがリーフは途中に出会う人すべてに挨拶をして回っているため15分かかる。最初のうちは突然現れた様に見えたリーフにみな驚いていたが、一ヶ月たつと慣れてきたのか今では普通に挨拶を交わ

している。

「よう、リーフ今日もまたソレできたのか？というか街中で魔法使  
うなよ」

学園についてすぐに見知った人物に出会った。彼は炎威翼<sup>えんいつばさ</sup>という  
名の国外からきた燃えるような赤い髪が特徴的な留学生だ。国同土  
の伝統的な交流の一環で国外の学園と数人の生徒を交換する制度が  
ある。翼はセレスティア王国がある大陸とは違う大陸の出身だ。

「いいだろ別に街中での攻撃魔法は禁止されているけど補助魔法の  
使用は制限されてないから」

「毎回思っけど便利な魔法だよな、ソレ」

街の中での攻撃系の魔法は禁止されている。だが補助系の魔法は  
使用してもいいことになっている。風や水の魔法で道の掃除をした  
り、街の街灯に火属性の魔法などが使われている。このように便利  
な魔法だが使い方一つで簡単に人を殺すことができる。また、防御  
魔法も禁止である。たとえば雷属性で防御した場合まわりのひとが  
感電してしまったりするからしい。そもそもはじまりがどこかの馬  
鹿が攻撃魔法がだめなら防御魔法を使えばいいと魔法を応用してひ  
とを襲ったのがこの法律が作られた理由らしい。

「翼も使えばいいじゃん、何だっけ火属性の唯一の移動魔法のアレ」

「『爆進』のことか？」

「そ、それ」

「馬鹿かお前はそんなことしたら警備兵につかまる」

『爆進』とは火属性で唯一の移動の補助魔法に指定されている魔法だ。自分の足下に小規模な爆発を起こことで、その爆風に乗って進む。それには『爆進』専用の靴が存在し、それを着用しなければ足の裏が火傷で大変なことになってしまう。ただ小規模とはいえ爆発を起こしているので地面に穴があいてしまう。達人級になると穴をあけずに進むことも可能らしい。

「だな、それだと街中穴だらけになっちまうな」

炎威とはあちらの大陸では少し名の知れた貴族らしい。ところが翼はそんなことは全く感じさせない、むしろ街でいたずらしまわっているガキのようで貴族のきの字すら感じないほどだ。

翼と出会ったのは学園の入学式の日だ。そのころはまだ、ただの異国からきた留学生のクラスメイトとしか認識していなかった。入学式から数日がたってやっと学園になじんできたときに騎士科の生徒が三人の貴族であろう豪華な身なりをしたおぼっちゃんにいじめられていた。もちろん正義感の強いリーフは迷わず助けにはいった。三人の中で一番偉そうにしていたリーダーっぽい金髪をオールバックにした少年にねらいをさだめドロップキックをかましてやった。その現場を目撃した翼はすかさずもう一人にドロップキックをした。二人は倒れたとき運悪く頭を打ったらしく気絶してしまい。残った一人ににらみをきかしたら何ともマヌケ面で気絶した二人を置いて逃げ出してしまった。騎士科の生徒は助けたリーフ達にお礼をいうと立ち去っていた。後で聞いた話、翼はリーフがドロップキックをしたのを見ておもしろそうだからとの理由で助けに入ったらしい。理由はそれぞれ違ったがそれ以来何かと翼と気が合い今では親友と呼び合う仲だ。

他国なら理由はどうであれ貴族にドロップキックをしたとあつては重罪である。だがここセレスティア王国では相手が貴族であつても非がある方が法律で裁かれる。初代セレスティア国王が国を建国した際『すべての国民は平等である』と宣言したからである。

法律でもこのことは記されているが現実ではそんな簡単なことではない。実際貴族の方が身分が上であり逆らう平民は少ない。法律上貴族が有罪になつても後からの報復があるかもしれないからだ。最近ではまともな貴族も増えてきている中で、横暴な貴族が未だはびこっている。

セレスティア魔法学園の魔法科の今年の入学者数は120人いた。1クラス30人の4クラスに分けられる。リーフと翼はAクラスに在籍している。クラス分けは教師達がくじ引きで決めているらしい。なんともいい加減な決め方だと思う。

魔法科は三年制で一年生では基礎を学び、二年生ではそれぞれ専攻したい分野に分かれる。三年生は前期は学園で授業をし、後期には基本自由になる。学園に行き勉強するもよし、卒業まで怠惰な生活をするもよし、たいていの人はギルドに行つて自分を磨くらしい。

一年生はおもに魔法学、魔法史、基礎学力（国語や数学など）を学ぶ。そして今は初めての魔法学の実習の時間なわけだが肝心の先生が来ないのだ。それも最初の授業からである。最初のうちはみんな静かに座って待っていたが慣れていくにうちにおしゃべりなどをして待つようになった。その先生が授業に来ないときもあった。「いやー、わりい寝てたわ」と弁解していた。果たしてそれが弁解と言えるか疑問である。



「今日もまた遅刻みたいだね先生」

「ん？レナか」

彼女の名前はレナ・イーファンス。腰まであるつややかな黒髪をし、いつも笑顔で誰にでも親切で優しい女の子だ。彼女の両親は魔法使いではない。レナは子供の時からたいそう可愛がられていた。それはレナが魔法使いだからではなくレナの両親の間には子供がなかなか生まれず諦め欠けていたときに生まれたのがレナであった。いつも柔和な笑顔をしていたのが印象的だった。リーフも今ほどではないがエミリオが生活のためにギルドの任務にでかけてたときによくお世話になっていた。ところが五年前に隣町に買い物にいくと言いつ残し出掛けた帰りに盗賊に襲われ亡くなってしまった。それからしばらくレナの笑顔は消え家に閉じ籠もっていた事もあったが今では笑顔も取り戻し元気なレナに戻った。

「いいじゃん授業しなくていいし」

「でも他のクラスと差ができないかな」

「大丈夫あんないい加減な先生だけど教え方わかりやすいし、それにレナは優秀な魔法使いだから大丈夫だよ。家でも自主勉強してるんだろ？もつと自分に自信をもてよ」

「うん、あいがとうリーフ」

レナは万能型な魔法使いだ。基本属性はすべて使えるうえに、希少な光属性を持っている。そして彼女のもつとも得意にしているのが治癒魔法だ。治癒魔法は水と光属性にしか使えない。その両方を使えるレナは国から期待されている。だがかえってそれがレナにプ

レッシャーとなっている。そのため周りからの期待に応えようと夜遅くまで勉強に励んでいるのをリーフは知っている。

「おいおい、教室で女の子口説くなよ」

さっきまで隣で机にもたれ爆睡していたはずの翼がニヤニヤと気持ち悪い顔をしながらこちらを眺めていた。

「馬鹿言つな口説いてなんかいない、その顔止めろよ気持ち悪い」

「そ、そうだよ」

「そんな、レナまで俺を気持ち悪いって言うのか」

「え？あ、違うの口説いてないに對してのそうだよであつて、顔が気持ち悪いのそうだよじゃ」

「そいつに関わつてはだめだレナ」

翼もわかつていたらしく悪のりしただけでまた顔を伏せて寝始めた。翼も俺たちのしんみりした雰囲気を変えるためにわざとあんな事を言つて和ませようとしたのだろう。多分。

魔法はいつたい何なのか。そもそもなぜ魔法というものは存在しているのか。それは今から約一万年ほど昔に遡る。

その頃は国などの大規模な人の集まりはなく小さな村が所々あるだけだった。いつの世も争いはつきもので村どうしはその土地や食べ物、信仰の違いなど様々な理由で対立し争っていた。さらにそこに魔物という問題もあったが、たいてい魔物は群れをなして行動はせず単体もしくは数体で行動してい魔法が存在しないこの時代でもさほど脅威にはならなかった。

だが人間とは愚かなもので何時まで経っても争いを止めなかった。戦士の男達は度重なる戦いで疲弊し数を減らした。まるでそれを知っているかのように魔物が一斉に人間の住む村に攻め入った。疲弊した戦士では村を守るなどできず次々に村は滅んだ。人々は争いを止めいつしか生き残った人々は身を寄せ合い一つの大きな街を作り魔物の襲撃に備えた。そもそも何故今まで単体でしか行動していなかった魔物が集団で襲撃したのかを調べていた。そしてわかったことが一つあった。魔物を操り村を襲わせた人のように人ではない魔物がいることがわかった。彼らはソレを魔人と呼びソレを倒そうとした。だが魔人の力は強大で魔人に挑んだ人々は次々に殺されていった。魔人は魔物を使い次々に人を殺しにかかった。人々が

魔人に適うはずがないと諦めだしたときに一人の男が現れた。男は『次元の旅人』とだけ名乗った。男は『魔法』という不思議な力を持ち魔物を次々に倒していった。異変に気づいた魔人は男を殺さるがため大量の魔物を率い攻めてきた。大地を覆い隠すほどの魔物にたとえ『次元の旅人』と名乗った男でも適うはずがないと諦めあ

る者は武器を手放し、ある者は泣き出し、ある者は逃げ出した。戦意をなくした彼が次に目にした光景は信じられないものだった。男は信じられないことに一大群の魔物の中に飛び込んでいった。大地は轟き、海は割れ、天を裂き空間には穴をあけ男は魔物を倒していた。人々が恐怖してやまなかった魔人をまるで赤子の手をひねるかのように殺してしまった。魔人が殺されると魔物はちりじりになり逃げ出した。

人々は歓喜し男を救世主と謳いみな手を取り合い喜んだ。その後男は数年間この世界にとどまり妻をとり子供も生まれ、幸せに暮らしていたのだという。

そのことは『次元を渡る救世主の伝説』として現代まで言い伝えられている。

そして今いるの魔法使いはみんな『次元の旅人』の子孫と考えられている。

というのが魔法使いの原点である。そのことは世界中の子供から老人までが知っていることだ。そして学園に入学して初めての魔法史の授業で教わることもある。ところがそれを魔法学の授業の時間に二時間にもおよぶ熱弁を見せた今年の魔法科の一年Aクラスの担任にして魔法学の教師でもあるアレク・チェンジー。いい加減で遅刻魔それに加え無気力、けれども担当した生徒を誰一人見捨てず面倒見のいいという矛盾した特徴を持つ教師として知られている。

「一体いつになれば来るんだよー！」

痺れを切らした生徒が叫んだ。最初は話して時間を潰していたが一時間もたつと話題もなくなったのか静かにかつイライラしながら

待っている。とても居心地がいい物ではなかった。そんな中に一人いびきをかいて熟睡している生徒がいる。生徒の名は炎威翼。異国からの留学生で文化の違いからか、いやそんな文化の違いはないだろうがとにかくこんな状況で爆睡できる神経を疑いたい。さらにそのいびきがただでさえイライラしている生徒のイライラにさらに拍車をかけていた。

「おはよう青少年達、第一訓練棟に集合な―」

「ちょっと待てや!」

生徒達のイライラで充満した教室に何食わぬ顔で入ってきて、言いたいことだけ言って出て行こうとした男性こそ魔法科の一年Aクラスを担当アレン・チェンジニである。鬼の形相で叫ぶ生徒を見て教室を出ようとしていたアレンは足を止めた。

「おお、どうしたお前らそんな怖い顔して、若いうちからそんな顔してたら年取ってからシワんなるぞ」

教室からすべての音が消えた。そしてクラス全員が思っただろう「誰のせいだ」と。そう、そうなのだこの男アレン・チェンジニは遅刻ぐらいではまったく悪いとは思っていないのだ。その証拠に今まで謝罪など一度も聞いていない。

アレン・チェンジニは教師歴2年の新任教師だ。彼はこのセレスティア魔法学園の卒業生で在学中はとても優秀で主席で学園を卒業した経歴を持つ。軍の上層部から直接スカウトもきていたがそれを「少し寝たいのでやめときます」と意味不明な理由でバッサリ切り捨て、二年後セレスティア魔法学園の教師として学園に戻ってきた。二年間何をしていたのかと聞いたところ寝ていたと答えた。普

通の人がそう答えたら明らかに冗談に聞こえるが、この人が言った  
ら冗談に聞こえない。

「ま、いつか。とりあえず第一訓練棟だかな遅れんなよ」

遅刻してきた人が言っても何の説得力ないが、もう何を言っても  
無駄だとみんな諦めて静かに移動し始めた。

セレスティア魔法学園の魔法科の施設は数々ある。その一つ学園  
開校時からある施設、実際に魔法を使うための施設が訓練棟である。  
訓練棟は全部で第一から第三訓練棟まであり、内壁には魔法で壊れ  
ないよう特殊な鉱石が使われている。この訓練棟一つでセレスティ  
ア王国の年間の国家予算に匹敵すると聞いたときはとても驚いた。  
それが三つである、当時のセレスティア王国がどれだけ強い魔法使  
いが必要としていたかを物語っている。

第一、第二訓練棟は普通で平べったいの地面があるだけのところ  
だが。第三訓練棟は特殊な作りとなっている。たとえば森や海、荒  
野、水中、空中など王国の魔法研究機関が作り出した装置を使い特  
殊な空間を作り出しているらしい。だがまだ試作段階で欠点がある、  
その一つが本当は空間を作り出しているのではなく木や水などをそ  
の場に作り出しているにすぎない。つまり空間を構成するのではな  
くその場に物体を投影しているようなものだ、なのでたまに戦闘に  
集中しすぎて壁に激突して気絶する人もいる。最終目標は本物の空  
間を作るのだという。

第一訓練棟に集まったわけだがみんな訓練棟の中を見回していた。  
訓練棟は普段から解放されていて生徒同士で戦うことができるしそ  
れを観戦することもできる。学園で魔法もろくに習っていない一年  
生は訓練棟に来る機会がなかった。とは言っても中には休憩用のベ

ンチぐらいしかなが、それでも生徒達は興味深げに訓練棟を観察していた。

「さて、お前達も訓練棟に来たからには魔法をバンバン使いたいと思っっているだろうがそれはまだ早い。まずは基礎の練習からだ。」

アレンの言葉を聞いて魔法を使えると思っていた生徒は意気消沈していた。

「だが俺の授業では始めてここにきたときは俺対数人の生徒で模擬試合をする事になっている。そいでだ今年のウチのクラスの調査票によると結構魔法を使い慣れている奴が何人かいるみたいだな。俺がやるのは面倒だしそいつらで試合しようと思う」

堂々と職務放棄を告げたアレンに生徒達は冷めた視線を送っていた。それを尻目に次々話を進めていく。

「クラスん中の強そうな四人に一对一の試合をしてもらう。でその四人はリーフ・クライン、炎威翼、レオン・バーナイド、ルリ・リーナスだ」

リーフは子供ころからエミリオに魔法を教わり風属性なら上級魔法を使える。それに翼とはこちらも貴族だから子供から魔法を嫌でも教え込まれているから当然だろう。もう一人のルリって子は貴族でもないみたいだし小柄でとても強そうには見えない。でも油断は出来ない魔法は体格や年齢など関係なく純粋な技量と魔力量で決まってくる。

技術は日々の訓練でコツコツ積み上げるもので、その過程で魔法を使い魔力を放出することによって結果魔力量が増える。つまり強い魔法使いになるには日々の努力を怠ってはいけないのだ。

リーフもどんなに忙しくても毎日最低でも一時間は魔法の練習をしているし、最近ではレナも治癒魔法の勉強の合間を縫っては魔力をあまくコントロールする練習をしていた。

「時間もあまりないから順番や対戦相手は俺が決める。一試合目は炎威翼対レオン・バーナイド。二試合目がリーフ・クライン対ルリ・リーナスだ。」

ちなみにレオン・バーナイドは騎士科の生徒をいじめていた三人の貴族の中で一番偉そうにしてリーフに飛び蹴りをくらい気絶した奴だ。

「うわあ。リーフは知ってるけど翼君ももう魔法使えるんだね。」

「まあ俺も一応貴族の端くれだから子供の頃から親に叩き込まれたからな。」レナも魔法のセンスはとて面白い。今は魔法を知らないだけで学園に通いじめに勉強すれば王国でも指折りの魔法使いにでもなれる。ましてや治癒魔法に限らず攻撃や防御魔法など魔法の才能があるというのがエミリオの見解である。

「おら、始めんぞー」

こうして魔法学最初の実習授業が始まった。



炎威の家柄はあちらの大陸では少し名の知れた貴族だ。翼の父親は一族始まって以来の逸材だと言われ。もちろんそれに恥じぬ力もあった。いや、むしろ国きつての逸材だった。最年少の18歳で国軍の精鋭部隊の隊長に就任し数々の戦果を挙げ異例の昇格で将軍クラスの地位まで上り詰めた。

その後25歳で結婚し、2年後に一人の男児が生まれた。その子供が翼である。翼は憧れの父親のよう立派な魔法使いになるため自ら進んで魔法の修行に励んだ。軍の仕事の合間を縫っては翼に魔法を教えてくれ、夜にはボロボロになって家に帰り母親に二人そろって怒られるのが日課だった。

翼が10歳のある日事件が起こった。仕事で当時対立関係だった国に軍隊を率い戦地へとむかった。結果は惨敗で父親は戦死したと聞かされた。父親の親しかった同僚の話では報告では兵力1万とあったが実際には五倍の5万もの兵力であった。何度も撤退を本部に進言した決まって「撤退は認めない。なんとしても敵国の進軍を阻止せよ」との返答であった。おかしいと思いながらも命令に従い進軍した。相手の兵力1万を想定し編成された自軍の兵士は1万3千弱、圧倒的な戦力の差に前線は瞬く間に破られ敵国が最終防衛線にさしかかろうとした時撤退を指示し撤退の時間を稼ぐため一人残り敵を食い止めたそうだ。

ところが国は『撤退を命令したにもかかわらず圧倒的な戦力差を知りながら突撃を命令した無知で自意識過剰の将軍がもたらした悲劇』と公表した。

そこからは悲劇の連続であった。炎威の屋敷から母親と共に追い

出され。今まで優しくしてくれた街の人たちは手のひらを返したように親子に罵声を浴びせた。中には今までと同じく接してくれる人も何人かはいた。

一文無しの彼らに使っていなかった家を提供してくれたし母親には働く場所も提供してくれた。幼かった翼を養うため一生懸命働いてくれた母親も翼が12歳のとき過労で倒れてしまった。一步外に出れば罵声を浴びる中一年中休まず働いた母親のため今度は翼が働く事にした。少ない給料から薬も買い母親を看病したがその皆無なく数ヶ月後母親は亡くなった。

数年たち14歳になった翼に炎威を追い出されてからずっと翼たち親子を支えてくれたおばさんに勧められたのがセレスティア王国との交換留学生だった。もう何の未練もないし、むしろこの国から出たいと思っていた翼には思ってもないチャンスだった。

それから父親が死んでから一度も使っていなかった魔法をいちから修行し、さらに魔法の基礎知識を毎日図書館に通い独学で学び選択試験に挑んだ。その結果見事交換留学生の二人のうちの一人に選ばれた。そこから自身を高めるためセレスティア魔法学園に入学するまでの間さらに修行に励んだ。

今無事セレスティア魔法学園に入学できた。

もしあのままあの国にいたなら何の変化もない退屈な日々を死ぬまで送っていただろう。街を歩いても罵声を浴びない、それどころか挨拶をしてくれる人が後を耐えない。あちらでは一人もいなかった友達も二人できた。留学を勧めてくれたおばさんに感謝したい。

なにより新しく友達ができたことがなにより嬉しかった。本当は

もう友達とは作らないと決めていた。もう裏切られるのが嫌だったから。けどアイツは俺を、いや誰が相手でも絶対に裏切ることはないとなんの根拠もないのにそう感じたんだ。

だから俺は信じ裏切らないリーフを絶対に。

今回は時間がなかったため訓練棟の中央に半径20メートルの円を引きその中で試合を行うことになった。

「勝敗は相手が負けを宣言するもしくは相手を気絶させるかだ。俺が危険と判断したら割って入るから多少全力でやってもいいぞ」

簡易試合リングの中で二人が距離をとりつつ向かい合っていた。そしてレオン・バーナイド翼を睨み付け言い放つ。

「だってさ、早めに負けを宣言しろよ。今回は前みたいに不意打ちなんて出来ないんだからな」

「お前をやったのはリーフであくまで俺がったのはお前の腰巾着のヒョロっとした不健康そうな奴だよ」

リングの外からなにやら聞こえたが翼は気にしない。そしてさらに続ける。

「それに魔法も使えない騎士科相手に三人がかりでしかいじめもできない貴族のおぼっちゃまなんか不意打ちなんかしなとも楽勝だね」

「言ってくれるじゃないか炎威イ！」

「おっと」

やすい挑発に乗り開始の合図もなしに雷撃を翼に撃つ。それを軽々と避けた翼は反撃するでもなくその場に立ち余裕の笑みを浮かべレオンを見据えなおも挑発していた。

それに答えるかのごとくさらに雷撃を続けざまに三発撃つ。それも軽々と避けた翼はレオンへと視線を戻す。ところが先ほどの場所にはおらず翼と距離をとりつつ横まで移動していた。すれ違いざまにレオンが雷の矢を放つ。

「サンダーアロー」

放たれた数本の雷の矢を横に飛び回避した。避けた際体制を崩した翼にレオンはここぞとばかりに容赦なく雷の矢を放つ。避けるのが無理と判断した翼は雷のやに向け火球を撃つ。翼の火球は無数の雷の矢を飲み込みレオンを襲った。自分のサンダーアローがたった一つの火球に打ち砕かれたのが信じられなかったのか回避が遅れ今度はレオンが体制を崩した。そこに翼が炎を浴びる。

「クソ、なめやがって」

炎が消え所々服や髪が焦げているもののレオンは火傷は負っていない

かった。魔法をくろう直前レオンはとつさに雷撃を放ち威力を軽減していた。だがレオンは気に入らなかった。レオンの放った雷の矢を軽々と飲み込んだ火球に比べ最後に翼の浴びせた炎は明らかに手加減をされていた。

「どういふ事だ炎威。さっきの炎、加減していただろう」

「ああ、これは模擬戦だから殺すわけにはいかないしな。それにこんなあつさりと負けたんじゃ貴族のプライドが傷つくだろ」

「僕は今から君を手加減なしの本気で倒すことにするよ」

レオンは指輪をはめている方の手を前に翳した。すると指輪が光を放ち次の瞬間レオンの指輪をはめた手に槍が握られていた。

槍を握りしめたレオンは先ほどとよりも速く翼へと近き槍を振るう。振るわれる槍を避け翼は火球を放つ。先程の雷の矢を打ち砕いたのと同じ威力で撃った火球をレオンは槍を振るっただけでいとも簡単に消し去った。その間に翼はレオンとの距離をとる。

「それ、魔装具だろ」

追撃をしてこないのを確認した翼はレオンに問う。

「そうだよ。認めたくはないが魔法の技術だけではなく僕は君に劣るようだ。だが劣っているなら補えばいいんだ。魔装具でね」

魔装具とは魔法使いをサポートする補助具のような物だ。魔法使いは魔法を使うのが下手だ。魔法を使う際魔法使いはまず魔力を練り体の外に出す。それから集中し呪文を唱えるか、もしくは完成した

魔法を頭で想像するした上で先程練った魔力から魔法へ変換することでやっと魔法が完成する。魔力は人の身体から一度出してしまふとそれを体外で留める事ができず魔法を作る過程で練った魔力の約七割が霧散してしまう。もちろん個人差もあるがほぼすべての魔法使いが本来の力の半分も発揮していない。一度体外に出た魔力の霧散を伏せずために開発されたのが魔装具である。魔装具には一度体外に出した魔力を集めることができ霧散を防止することが出来る。とは言いつつも魔装具を使用しても約二割しか霧散を防ぐことは出来ない。こうしてやっと魔法使いが魔装具を使い半分程度の力を使うことが出来る。

魔装具には補助能力を付加出来る。魔装具の原材料には魔法石が使われており、それが魔力を吸収することで魔力の霧散を防ぐ。魔法石にはいくつ種類がありただ魔力を吸収するものと、吸収した魔力を火、風、水、雷、土など特定の魔力に勝手に変換してしまう希少な魔法石も存在している。特定の魔力に変換することでさらに約一割魔力の吸収率が上がる。さらに身体能力の強化など様々な補助能力を魔装具には付加することが出来る。魔法石は採掘量も少なく原材料にほぼ魔法石が使用されている魔装具はとても高価なものだ。

そしてレオンが使用している魔装具には雷の魔法石に身体能力の強化が付加されている。つまりレオンの魔法の威力は今までの二倍。それに加え身体能力の強化が加わっている。それは先ほどまでのレオンよりも数段階強くなっていることを示している。

魔装具でレオンが強化した事により翼は防戦一方になっている。

「くられ、『雷槍撃』」

「ぐう」

帯電させた槍でレオンが翼を突く。その攻撃を翼は槍を避けることは出来たが突くと同時に帯電されていた電気が前方に放出され、その放出された電気を少し浴び動きが鈍る。その隙をねらいレオンが追撃をしようとするが、その前に翼が地面に向け数発の火球を撃ちその衝撃で土煙が舞い上がり視界を塞いだ。土煙が収まり翼とレオンはお互いを視認する。

「これ以上続けると俺がますます不利になるみたいだな。だから次で決める」

「魔装具まで使ったんだ僕はここで君に負ける訳にはいかない。勝たせて貰うよ炎威」

二人には試合当初の相手を挑発する様な態度や、冷静さを失っていた時とは違い相手に勝つというただそれだけ考え。次の一撃に賭けていた。

「『雷槍撃』」

「『爆進』」

レオンが帯電させた槍を突くまでに翼の足下に小規模の爆発が起り、その爆風に乗り翼がレオンの懷まで跳んだ。

「なっ」

「はあっ、『炎掌波』」

さらにそこから炎を纏った手の平をレオンの腹にたたき込んだ。

「ぐわぁ」

「そこまで。この試合、炎威の勝利だ」

掌天をどて腹に受けたレオンが倒れ、レオンの帯電した槍に触れてしまった翼は膝をつく。倒れたレオンにアレンが近づき気絶したのを確認すると勝者の名を宣言した。



魔法学の初めての实技授業での模擬試合一回戦炎威翼対レオン・バーナイドの試合は翼の勝利で終わった。両者とも大怪我をすることなく軽い火傷を負ったものだった。

試合終了後リングから気絶したレオンをアレンが訓練棟端にある休憩用のベンチに運び、右足に火傷を負った翼にリーフが肩を貸し同じくベンチまで運んだ。

「お前バカだろ、普通の靴で『爆進』使うなんて本当お前バカだろ」

「うるせ、俺は実戦経験少ないからあれくらいしか思いつかなかったんだよ。それにこの靴には一応靴底に鉄板入れてあったんだぞ」

「鉄板入りでその怪我って不便すぎだろその魔法」

靴底に鉄板を入れてなお『爆進』の爆発の威力は鉄板を突き破り足の裏全体に火傷を負っていた。

怪我をした生徒は普段なら務室に運ばれるがレナが自分が二人を治療するとアレンに提案し、それに反対する理由もないのでレナに二人の治療が任された。

まず最初にレナはベンチに翼を座らせると怪我した右足の具合を調べる。

「足の裏全体を火傷した割に多少出血があるだけで他は大丈夫そう。これなら私でも充分治療が可能だと思う」

傷口を調べ終り傷の具合を患者である翼に伝えたとレナは火傷した足に手を翳すと一度目を瞑り翳した手に魔力を集め治癒魔法を展開する。展開と同時にレナの手が温かみのある光に包まれる。翳した手の光がやさしく足を包みこみ少しづつ足の火傷し爛れた皮膚を治していく。足が光に包まれ十数秒で火傷を負った足は綺麗な火傷するまえの足へと治った。

「どうかな。歩いてみて違和感があったりしない？」

「いや大丈夫、なんともないみたいだ。レナありがとう礼を言う」

次いでレオンの寝かされているベンチへと移動する。最後の翼の魔法によつての腹部部分に穴が開いた服をレナは捲りあげ腹部の火傷したところに光に包まれた手を翳す。腹部の火傷を治し終えたレナはそのまま治癒魔法を今度はレオンの頭へと手を翳す。十数秒ほど経つとレオンは意識を取り戻した。

目を覚ましたレオンはベンチから身体を起こし何度か瞬きした。次第に意識がはつきりしてきたのか周囲を見渡す。

「そうか僕は負けたんだね」

とレオンは呟いた。

それは返答を求めているというよりは負けたことを自分に言い聞かせているようにも聞こえた。そして思い出したかのように怪我をしていた腹部に目をむける。

「怪我はイーファンさんが治してくれたんだね」

「え…、はい」

お礼を言われたのが意外だったのかレナは返事が遅れた。

「先生。少し気分が優れないので早退させていただきます」

「ああ、今日はゆっくり休めよ」

「ありがとうございます」

訓練棟を出ていくさいレオンは一度翼を一見し去っていった。

一時中断となった試合を仕切りなおし二回戦を始めることになった。先程の試合で地面が所々穴が空いたり隆起してしまったので少し離れた場所に新たにリングを作った。

「二試合目はリーフ・クライン対ルリ・リイナーナスだ。さっさとリングに入れ」

ダルそうに次の試合の準備をしていたアレンが準備を終えリーフとルリを呼ぶ。

「頑張れよリーフ」

「怪我をしたら私が可能な限り治すけど、出来ることなら怪我しな

いでね。」

「おう、ありがとな」

レナたちから離れリーフは試合リングに入った。そこには一人の小柄な少女が立っていた。

彼女ルリ・リーナスはリーフたちのクラスで浮いた存在だった。ルリはとにかく無表情で入学式から一ヶ月たった今でも一度も表情を変えたところを誰も見たことがない。さらには声すら発したこともない。授業で教師にあてられてもクラスメートが話し掛けても無視してぼーっと前を向いている。教師もクラスメートもルリに話し掛けることを諦めてた。いつしかルリには感情がない等の噂がたつようになり彼女に近く人はいなくなつた。その彼女の戦う姿を見てみたいのか先程の試合とは違った雰囲気離れたクラスメートから感じた。

リーフの前にはルリが立っていた。触れてしまっただけで壊れてしまいそうなほど小柄で華奢な体の少女の瞳には噂通り感情を一切感じさせない。それどころかまるでこの世のもの全てに興味すらないようにも見える。やる気がないのかぼーっと佇んでいた。

「そんじゃ第二試合リーフ・クライン対ルリ・リーナスの試合をおこなう。はじめろ」

アレンの試合開始の合図があり本来なら直後に戦闘が始まるはずだが依然としてルリはぼーっと佇んで動かなかった。当然リーフも合図と同時に動くはずだったがピクリとも動こうとしないルリに一歩踏み出しただけで止まってしまう。

自信があり構えなくともリーフぐらい対処出来ると思っているのかそれとも油断させようとしているのか、ただ単に試合事態に興味がないのかなどを考えたリーフだがルリの考えが全く読めずとりあえず近づかず魔法による攻撃をしかける。

様子見でルリへ突風を放つ。ルリがもしも避けなかった時のことを考え威力を抑えた魔法だ。迫る魔法に何の反応も見せぬまま突風が襲いかかる。直後ルリの立っていた場所が黒に塗り潰された。試合を見ていた生徒は黒く漂うモノを眺めていると金属音が響きわたり、音した場には身丈以上もある大鎌を振り下ろすルリにその大鎌を刀で防ぐリーフの姿があった。

ルリはその小柄な体では信じられない力で大鎌を叩きつけ刀と拮抗した、しかし力の競り合いでは勝てないと分かると大鎌を引く。鎌を引いたのも束の間今度は手数を増やし斬り掛かる。

先ほどの攻撃を防いだときにあの鎌がかなりの質量だとわかる。一般の男性がやっと持つのが精一杯の重さのはずだ。それを彼女は軽々と振り回している。まったくあの体のどこにそんな力があるのか疑問に思い大鎌を受け流しているとそのちよつとした隙を突かれる。

今までの小さな攻撃から一転大なモーションで大鎌を振り抜く。ズズッと大鎌の尾をひくように黒いものが発生する。大鎌は避けたものの発生した黒いものに触れしまった。ソレは体傷つけることな

くをすり抜けていく。

「くっ」

と同時に脱力感をリーフは覚える。多分黒いものが体をすり抜けたとき魔力が吸収され黒いものと一緒に体から出ていったのだろう。

「吸収ってことはやっぱりソレは闇属性でことか」

「……」

返信はなくてもちろんリーフも返信を期待してはいなかった。自分の手の内を敵に晒すのを嫌がたのかただ単に無口なのか。多分後者なのだろうが。持っていていかれた魔力は少量だが、魔力が無くなれば戦闘に支障をきたすため何度もうけにうけにはいかない。

魔力を吸収されるのを避けるためリーフは距離をとり魔法による攻撃をする。

刀を振りカマイタチを放つ。最初のように手加減をした魔法ではなく手加減なしの魔法だ。迫りくるカマイタチを鬱陶しそうにルリは見つめる。カマイタチがルリにあたる瞬間黒い靄が現れカマイタチが吸収された。

「やっかいだな」

魔法も吸収されてしまうため魔法による攻撃も無駄だろう。あるいは吸収が追いつかないほどの魔力を込めた魔法を使えばいいがルリの闇魔法の吸収量が解らない以上それは止めた方がいいだろう。となると今有効な攻撃手段は武器による直接攻撃となる。体から直接魔力を吸収されるリスクもあるが今度は避ければいい。

「ド레인ミスト」

まるで次のリーフの行動が分かっているかのようにルリが先手をうつ。二人の周りを薄い黒い霧が覆う。目暗ましの霧ならよかった

のだが少しずつ魔力を吸収されていくのがわかる。本当にやっかいだとリーフは思う。近づいたら大鎌による攻撃、魔法による攻撃もダメ、何もしなくても魔力が吸収されていく。

「なら、攻める！」

このままの状態では負けは確定してるも同然、それなら攻めて攻めて突破口を見つける。次の行動が決まったリーフは先ほどよりも魔力を込めたカマイタチをルリに放つ。リーフのとった行動に完全に興味を失ったようにルリは迫りくるカマイタチに手を前にだし黒い靄で防ぐ。

「……っ！」

靄が消えルリが見たものは刀を振り下ろすリーフの姿だった。大鎌で刀の軌道を逸らすとともに体をひねりかわす。この攻撃がかわされることを予想していたリーフはすかさず次の攻撃にうつる。先ほどと違い今度はリーフが攻めルリが防ぐ。リーフの猛攻に隙ができたルリを風で吹き飛ばし壁に叩きつけた。壁にもたれかかるルリの顔のすぐ横に刀を突き刺す。

「俺の勝ちだな」

「……」

ルリはリーフの言葉になんの反応を示さない。俯いたままのルリに身長差があるリーフには顔を伺うことは出来なかった。試合終了を合図を促すためアレンに目を向けたリーフの脇腹に衝撃が襲う。

「があっ！」

蹴り飛ばされたリーフは脇腹を押さえながらルリを探す。前後左右見回したがルリの姿は見当たらない。

「上かッ」

大量の黒い霧を大鎌に纏わせたルリが大鎌を振り下ろしリーフを襲う。後ろに跳び躲したが大鎌が刺さった場所を中心に地面が陥没し石つぶてと砂煙がさらにリーフを襲う。砂煙から抜け出したリーフに休む暇さえあたえないかのようにルリが攻撃を続ける。

心臓や首、腱といった人体の急所を寸分も狂わず正確に狙い攻撃を繰り返すルリは普段の無表情から一変していた。その顔に張りつく表情は笑顔。無邪気で楽しそうな幼い子供のような笑顔。それでいて残虐で残酷な笑顔。だが微かに浮かべる哀しそうな笑顔。

その哀しみの表情にきをとられたリーフの首を大鎌が切り裂く。間一髪の所で避けたが薄皮が裂かれた。今の攻撃は間違いなく首を切り落とす、殺すつもりなのなんの躊躇ないものだった。

さらに休むことなく攻撃は続く。この時点で普通試合を止めに入るだろうと思うがその気配はない。黒い霧に舞う砂ぼこりに遮られる視界だが生徒ならともなく教師であるアレンが何が起こっているのか解らないはずがない。それでいて止めにはいらぬのは面倒くさいからなのかそれとリーフがこんなものでやられるはずがないとも思っているのかは解らないが早く止めてくれと思ひ苦笑を浮かべる。



そんなリーフの願いも届かず試合は続く。防戦一方のリーフの体には大鎌による切り傷が増え、ルリの攻撃は時間がたつにつれスピードが増していく。さらに大鎌が振るわれるたびに尾を引くように発生する黒い靄により魔力が削られていく。いったん間合いをとりたいリーフは

03 (後書き)

終・了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5876j/>

---

～裏切りの空～ 【学園篇】

2011年11月23日20時52分発行